東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

平和を希求し,武力に抵抗した文学青年考察 : 尹東柱,小林多喜二,鶴彬,槇村浩を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李,修京 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/107174

東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅰ　61：99－115，2010.

平和を希求し，武力に抵抗した文学青年考察
；尹東柱，小林多喜二，鶴彬，槇村浩を中心に

李　　修　京*

アジア言語・文化研究分野

（2009年８月31日受理）

要　旨

この論文は近代日本の軍国主義の暴圧に抗い，20代で殺された青年文学者たちの中で，尹東柱，小林多喜二，鶴彬，槇村浩を中心に考察する。そして，彼等が追求しようとしたもっとも人間的平和社会への希求を再確認し，今なお評価の高い彼等の時代認識と未来への強いメッセージとなった生き様について考える。

キーワード：20代の死，抵抗文学者，非暴力，文学の力

はじめに

少々唐突な出だしではあるが，本稿は「文学」作品が時代を経て今なおその力を発揮し，現代社会を照らしながら我々が歩んでいる未来への知見として示唆することに留意しながら，近代日本帝国下で活躍し，20代で命を落とした当時の文学者の動きを考察しようとする試みである。

文学の歴史的社会的貢献について時代や社会，民族，宗教を超えて実に多くの論客が力説し，論じてきたことは，筆者があえてここで指摘するまでもなかろう。

多様かつ豊かな内容で人類の精神史を支え，時代の導き・社会の灯となってきた文学の威力とその命は周知の通りであるが，だからこそ，その力を恐れる側からは恐怖の存在とみなされ，支配者側にとって不都合ないし不憫な内容の作品だと思えば余儀なく検閲を理由にした削除や発売禁止，または禁書とされ，時には作者の命まで奪われることが多々あった。その背景には人間の知的好奇心はもちろん，合理的思考を求める知性や理性を伴った人間の本能的知への渇望と真実への希求，不条理に対する抵抗の力が存在した。そのため，時には社会全体を動かす大きな動力にも繋がったり，時代が経ってもその作品に内在した作者の意図や社会の描き方は衰えることもなく，輝き，我々の現在や未来への指針にもなってくれたりもする。その側面から文学の偉大さを評価することができる。

本稿はその意味で，若き青年文学者らがその文学的才能を発揮しつつも，社会の矛盾に抵抗したことが理由で理不尽な死に追いやられた尹東柱，小林多喜二，鶴彬，槇村浩を紹介し，急変する社会の陰で見え隠れする暗鬱な社会状況によって再来し得る不幸な歴史に警鐘を鳴らす時代の試金石となった彼らの生きざまや作品などを考える契機にしたい。また，武力支配に文学を手段として短命を余儀なくされた彼らが追求した世界とは何か，如何に時代に翻弄されたか，今の我々に示唆するところは何かについて考えてみる。

なお，本稿では前述のように，北間島（現在の中国吉林省）で生まれ，朝鮮半島を経て日本に留学し，治安維持法という罪名で敗戦直前に謎の獄死をし，今や世界各地でその詩や生涯をたたえられながら，平和的象徴として高く評価されつつある尹東柱をはじめ，日本側の文学者として拷問死させられ，映画も公開されている

＊　東京学芸大学人文社会科学系

小林多喜二，鶴彬，そして神童と呼ばれた槇村浩について概括し，20代に生涯を閉じた彼らの共通認識について考えてみることにする。

1．東アジアの平和具現の柱となった「東柱」

日本が大陸経営欲のために起こした先の戦争によって未曾有の命が失われたことは周知の通りである。2010年は韓国併合100年にあたる年であり，韓国では日本による併合をいわゆる「庚戌國恥」と称している。日本の侵略支配の過程で行われた武断統治の圧力に反発し，朝鮮民衆が独立万歳運動，いわゆる３・１運動に決起すると，総督府・当局はより柔軟な植民地統治政策や戦争遂行のために宥和政策を展開するとともに，‘一視同仁’‘同根同祖’‘八紘一宇’‘天皇の赤子’などの同化政策を掲げるのである。そのような動きの中で，一抹の希望でも見出そうとして５大列強入りを果たしたアジアの先進文化を標榜する当時の日本に留学した朝鮮半島からの若者は少なくない。厳しい朝鮮半島内での思想弾圧を避けて，遠くに留学することよりも日本で新しい思潮や文化的刺激の遭遇に期待しつつ，釜関連絡船に身を寄せて先進国日本を目指した若者たち。その中には，祖国の独立や民族の啓蒙のために社会変革に尽力し，日本で受けた思想的影響などを用いて1925年にはKAPF（朝鮮プロレタリア芸術同盟）を発足し，大衆芸術論を展開したり，民衆の社会的意識の高揚に貢献したりした留学帰りの若者もいた。1925年には治安維持法が公布されるが，内地の日本よりも厳しい弾圧の中で，民族自決への目的を貫徹するため植民地統治に抗う人々も多々現れた。しかし，日本は次第に満州事変から日中全面戦争へと突入し，太平洋戦争を引き起こすとともに，挙国一致の総力戦を叫びながら酷寒の時代へと向かうのである。そういった状況によって，中国も朝鮮半島も暗雲漂う不安の中に晒されていたが，それでも時代認識を背負いつつ，文学への夢を抱き，日本に留学した尹東柱（ユンドンジュ，1917～1945）だったが，京都の同志社大学に在学中に治安維持法の罪名で捕まり，留学の夢は破れ，京都で裁判を受けた後，福岡に移送され，1945年の２月16日に福岡刑務所で「脳溢血」という死因で獄死した。その生涯を概括し，尹東柱の動向について考察してみることにする。

27才の若さで異国の地で理不尽な死[1]を遂げた尹東柱は1917年12月30日，当時の満州北間島の明東で生まれた。生涯の運命をともにする従兄弟の宋夢奎（ソンモンギュ，1917～1945）[2]とは同年同地生まれで，後に明東小学校や恩眞中学（写真参照。宋夢奎は要視察人のため，大成中学に進学。今は六つの学校が統合されてある）・平壌の崇実中学校・光明中学校からソウルの延禧専門学校を経て日本に留学し，京都で一緒に捕まり，死ぬ時も同じ刑務所で同様の境遇にさらされ，1945年にその短い生涯を閉じた。

（左より尹東柱と宋夢奎らの故郷と墓石，彼らの母校，撮影：李　修京）

先に京都帝大に留学中であった宋の影響や，文学勉強の深化を目指して1942年に渡日するのだが，時代は太平洋戦争に突入した戦時であり，思想弾圧に目を光らせる特高警察の機能も強化される時期であった。

尹東柱は医学部への進学を強調する父親との葛藤で苦しむ[3]が，祖父の理解を得て結果的に文学への修行を試みて1938年４月，延禧専門学校（現在の延世大学）へ宋夢奎と共に入学する。そして，翌年の２月には宋夢奎と同級生の白山仁俊，姜處重ら数名と共に朝鮮文学の同人誌出版の企画を試みるとともに，同学校同窓会誌「文友」の幹事であった宋夢奎とともに作品発表などを行った。しかし，1941年に同学校を卒業した尹東柱らはその後，上級学校への進学をするために，創氏改名が強いられる中で「尹」という姓を「平沼」に，「宋」は「宋村」に創氏し，日本留学を選ぶのである。

尹東柱は京都に行く前に東京の立教大学に入学するものの，学校には馴染めず，結果的に1942年９月，中学時代に詩的影響を受けた鄭芝溶の母校でもあった同志社大学文学部英語英文学（選科）に入学するのである。韓国の国民的詩人と称される鄭芝溶[4]だが，尹東柱は生涯を通して彼の詩を好み，尹東柱の詩にも鄭芝溶の文

学的影響が与えられているのが確認できる[5]。

天恵の自然と古の都に流れる鴨川辺，多くの寺院や神社，そして近代的学問への誘いを醸し出す京都の雰囲気が，戦場の空気で厭世的になっていた若い詩人にはより情緒的かつ魅力的だったことは簡単に推察することができよう。私事だが，筆者は1999年３月に，読売テレビの「京の音」に出演し，鴨川に立って鄭芝溶の詩「鴨川」を朗読したことがある[6]。彼の詩には同志社大学で学んだであろう英文学の影響もあって，近代モダニズム的清新な感覚が駆使されつつも，詩作全体に流れる東洋的叙情性が絡み合って上手く詠われているのだと感じたことがある。尹東柱の作品の根底に流れる郷愁や切なさ，叙情的雰囲気は京都という独特な雰囲気に融け込めそうだと言ったら言い過ぎであろうか。いずれにしろ，尹東柱は最終的に留学先を京都に選び，既に京都帝大生となっていた宋夢奎と度々会うことになるのである。しかし，挙国一致の戦争遂行が叫ばれる時代状況は彼等の朝鮮語表現や朝鮮人同士の集いさえ反逆的行為と見なされ，尹東柱は1943年７月14日に宋夢奎とともに治安維持法違反の思想犯という容疑で京都の下鴨署に検挙された。

宋夢奎は早くから民族独立への意識に目覚め，恩眞中学校の教師・明義朝の民族教育に触発され，後に南京にいた独立運動家の金九一派らと行動を共にするなど，独立運動への模索に尽力した経緯で何度か逮捕され，「要視察人物」として監視対象になっていた。一方の尹東柱は，政治活動よりも文学に心酔する物静かな性格を有していたが，宋夢奎との会合を理由にした警察は，「両名は昭和一六年一二月八日偶大東亜戦争の勃発するや，戦争の究極に於て日本の敗戦は必至なりと妄断し，日本の国力疲弊せる機を利用して朝鮮独立の世論喚起を為し民衆を蜂起せしめて一挙に独立を完遂せんと意図し，在京都朝鮮人学生数名を目標に働きかけ同志の獲得に努めたる結果第三高等学校生高照(ママ)旭を獲得し，昭和一七年一〇月頃より本年七月頃迄の間京都市内各所に於て三名にて屢会合し，民族意識の高揚，乃至具体的運動方針等につき協議しつつありたる」[7]ことで検挙され，送局となった。内務省警保局の『特高月報』1943年12月の「在留朝鮮人運動の状況」には送局被疑者として以下のように記載されている。

〈参考表：送局被疑者〉

検挙年月日	送局月日	本籍住所	職業	氏名年齢
7.14	12.6	本籍　咸北慶興郡雄基邑雄尙洞422 住所　京都市左京区北白川東平井町60	京大文学部 史学選科生	宗(ママ)村夢奎 （27）
7.14	12.6	本籍　咸北清津府浦須町76 住所　京都市左京区田中高原町27　武田アパート	同志社大文 学部選科生	平沼東柱 （26）
7.14	12.6	本籍　京畿道　京城府桂洞 住所　京都市左京区北白川東平井町60	第三高校生	高島(ママ)熙旭 （22）

【注】：内務省警保局『特高月報』1943年12月分「在留朝鮮人運動の状況　在京都朝鮮人学生民族主義グループ事件策動概要」118頁。朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成　第五巻』1976年，三一書房，294頁より引用。

その結果，事件名「治安維持法違反被告事件（朝鮮独立運動）」という判決の下で尹東柱は治安維持法違反を理由に1944年３月31日，京都地裁から懲役２年（求刑３年，未決勾留120日算入）の判決を渡された。因みに宋夢奎も，在京都朝鮮人学生民族主義グループ事件策動の中心人物とされて同年４月13日に懲役２年（求刑３年）となり，高熙旭は不起訴処分となった。

そして，二人は京都から福岡刑務所に移送され，米軍の空襲が激化する1945年２月16日と３月7日に福岡刑務所でそれぞれの生涯を閉じた[8]。この獄死の背景には人体実験説が存在する。当時の九州帝国大学医学部の人体実験の対象として福岡刑務所の収監者が選ばれた可能性が高いという説である。

彼らの処分は実刑の懲役２年であったが，なぜ刑期を待たないで，理由不明な獄死状態へと追い込んだか。どのような焦りがそうさせたのか。なぜ京都から福岡への移送となったのか。なぜ死後の引き取り連絡となったか。その死にはいくつかの疑問が残されている。しかし，彼等の死に関わった当時の刑務所関係者はもちろん，彼らの死を命じた関連者は誰もその件について触れることなく，沈黙している。よほどの極秘状況であることはそのことからも簡単に推察することができる。しかし，米軍の生体実験を目撃した医者の証言（『朝日

新聞』2005年12月30日）など，当時の実態を追究できる素材はいくつか存在しており，公表されつつある。戦後64年が経ても，当時の事件や事情を知る関係者の証言や証拠の自省的良心的提示がなされていないことは残念でならない。

なお，尹東柱についてはその後，同志社大学のキャンパス内に尹東柱の死後50周年にあたる1995年２月16日，同志社校友会の働きかけで記念詩碑が建てられた。その銘板には，彼の代表的な詩「序詩」のハングル版が刻まれている。

서시
죽는 날까지 하늘을 우러러
한점 부끄럼이 없기를
잎새에 이는 바람에도
나는 괴로와했다
별을 노래하는 마음으로
모든 죽어가는 것들을 사랑해야지
그리고 나한테 주어진 길을
걸어가야겠다.

오늘밤에도 별이 바람에 스치운다.＜하늘과 바람과 별과 시，정음사，1948＞

「序詩」
死ぬ日まで天[9]を仰ぎ　一点の恥もなきことを，
草葉にそよぐ風にも　わたしは心苦しんだ。
星をうたう心で　あらゆる死するものを愛せねば。
そしてわたしに与えられた道を　歩みゆかねば。
今宵も星が風に吹き晒される。

また，尹東柱を追悼し，記念するため，母校で龍井にある恩眞中学の跡地（1946年に六つの中学校を合併する。現在は龍井中学校）や，ソウルの延世大学の校庭にも彼の記念碑が建てられており[10]，彼が京都で住んでいた武田アパートの跡地に記念碑が，2009年７月にはソウルの下宿先があった仁旺山の青雲洞にも「序詩」が刻まれた詩碑が建てられ，詩人の丘が整備された[11]。これは韓国の尹東柱記念事業会が展開する事業の一つとして，ソウル市内を見下ろす中心的山に詩人の丘を設けて，尹東柱の文学的・平和的遺志を刻もうとする動きとして注目を浴びた[12]。

（ソウル市内の青雲公園に造成された尹東柱詩人の丘と詩碑，撮影：李　修京）

また，同時期に，京都の国際平和ミュージアムの安斎育郎名誉館長らが，尹東柱が1943年５月，逮捕される２カ月前に同志社大学の学友らと訪ねた宇治天ヶ瀬吊り橋の周辺に，「記憶と和解の碑」を建てようとする市民運動を行っていることが報じられ，東アジアにおける平和市民運動として紹介された[13]。

このような国境を越えた広がりの根底には単に尹東柱の作品や無残な死に対する同情だけがあるわけではない。むしろ，彼の生涯や作品に現れた世界を通して，「平和社会」を構築する指南として尹東柱の清心な志を

刻もうとする人々の希求や，社会の暴力や武力に反対する非暴力精神（Ahimsa）の市民意識の鼓舞を内在し，地球市民の連帯と国際交流の必要性が時代の課題であることに気付き，地球規模で共有すべき武力阻止・平和の具現への促しとして考える人が多い。そのため，尹東柱は日韓の多くの人に広く親しまれているだけではなく，世界各地にその「自然の美しさを繊細かつ清冽に詠い，懊悩する人間の生き様を見事に吐露し，純潔かつ凛然とした彼らしい表現で導いてくれる数々の作品」[14]に魅せられた人によって広く紹介されつつある。彼の詩才やその死，彼を通して平和を追求しようとする動きは大陸を隔てて，ワシントンでも尹東柱の詩碑を立てようとする動きになっている[15]。若い詩人の異国での死や強圧に抵抗して母語で自分の感覚・感情を貫徹した抵抗の精神，作品に現れた切ないほど美しい純粋さなどが動機付けとなり，彼の意識を世界に広めようとする動きへと繋がっているといっても過言ではない。

なお，2009年２月13日の金曜日，136年の歴史と伝統を持つ日本の教師養成大学として知られ，戦時中は陸軍がおかれていた東京学芸大学で初めて追悼前夜祭が行われた。筆者が韓国の文芸評論家のＩ氏から依頼を受けたのが契機となったが，その前から人権と平和学の側面から東アジアの平和社会を構築する際の架け橋としての尹東柱を意識し，研究発表を続けてきた経緯があった。そして，何よりも，国立大学法人の教員養成大学として，戦争やその他の不幸な歴史を繰り返してはならない，「非暴力」の教えこそ争いのない未来を担う人材育成を担う教師養成大学としての教育指針の一環だと認識し，平和社会を作るために実践的教育を心懸ける大学の趣旨に通じる内容でもあったため，開催に至ったのである。

尹東柱は後述する多喜二のように思想的な政治活動に徹したわけではないが，真実が歪められ，母語をもって感情の表現さえすることも出来なかった時代に生き，孤高かつ豊かな叙情詩を通して静かな‘抵抗の詩人’の道を歩んだことで評価されている。異国の地で散った文学青年たちの死だが，死後64年が過ぎても今なお我々に鮮烈に生き続けている。

２．クラルテ思想と多喜二

多喜二の文学思想には欧米から発せられたクラルテ思想抜きには語れない部分がある。クラルテ思想とは，いわゆる世界の文化知識人が連帯して戦争に反対すべき行動を起こそうとする趣旨の反戦文芸運動である。第一次世界大戦に参戦し，前線で闘ったフランス人作家のアンリ・バルビュスらによって戦場の実態が告発され，その作品『砲火（le Feu）』が1916年度のゴンクール賞を受賞した。その後，発表された小説『クラルテ（Clarté：光・光明・真実）』の名前をとって1919年10月に，世界の文学者・文化人が集まり，特権階層が遂行する戦争ビジネス[16]に反対する国際的連帯運動として展開するのである[17]。これらの運動は「人類は一種類の人間しかいない」ことを掲げ，命への尊厳と差別や暴力のない平等平和社会を具現しようとする趣旨で，ロマン・ローランやアインシュタイン，ピカソ，マチス，ゴーリキー，ラッセル，アナトール・フランスなど，世界中の錚々たる文化人の賛同の下で結成され，その趣旨は支配国の日本にも，被支配国の韓国の人々にも社会的影響を与えた[18]。中でも日本では，『種蒔く人』誌の創刊者の一人である小牧近江や日本プロレタリア文学理論を展開させた青野季吉，元・同志社大学の総長であった住谷悦治，マルクス・エンゲルスやレーニンの訳者であった石堂清倫などに影響を与えた。また，クラルテ運動は苛酷な労働と低賃金に酷使される労働者の悲惨な状況を告発し，権力の横暴さを小説で訴え，29才の若さで拷問死した小林多喜二の初期思想にも影響を与えた。1903年10月に秋田の貧農の息子として生まれた多喜二は，苦学するかたわら，小樽高等商業学校を卒業後，北海道拓殖銀行の小樽支店で働くようになる。しかし，学生時代から労働運動やプロレタリア文学に興味を抱いていた多喜二は，アンリ・バルビュスの‘反戦・思想のインターナショナル’に共鳴し，文学を手段として社会の‘クラルテ’となることを試みつつ，1924年４月に同人誌の『クラルテ』を発行するのである[19]。創刊号にはクラルテ運動の趣旨が掲載され，「さうだ，此の世には一つの神が存在する。吾々の広大な内的生命を導引くためには，また，全人類の生命のうちに含まれてゐる分担を導引くためには決してそれから眼を外らしてはならない一つの神が存在する。真理といふ神だ。―アンリ・バルビュス「クラルテ」より―」が最初のページを飾っている。まさに戦争の実態と愛国の美名の下で犠牲になるのは民衆であり，それらを操って利潤を得るのは一部の軍・特権層と財閥であり，戦争が如何に人民の血を吸い上げるビジネスか，「その真実を見極めること＝神＝クラルテ」であると力説したバルビュスの考えそのものである。雑誌名を『クラルテ』と

して小樽で同人誌を作り，自分らの作品を発表することが当時の自分らにできることだと自覚し，文学者の社会的役割に目覚めて実践的に動いたのが『クラルテ』発行であったといえる。創刊号には多喜二の「暴風雨（あらし）もよひ」と同人の詩・短歌が所収されている。第２輯の１頁にはではアンリ・バルビュスの「感情よりも理性，慈悲よりも正義，明瞭な観念」を述べた文章が飾られ，その後も同人以外に，トルストイの言葉などが引用され，彼らの文学活動に対する趣旨をあらわにした。しかし，何よりも文筆活動による反戦・反権力活動を図ろうとした多喜二の『クラルテ』の趣旨は，1925年に公布された治安維持法の弾圧と経済的困窮によって，1926年３月の第５輯の発行を最後に終刊となった。しかし，文学者の社会的役割，即ち，民衆に対する権力側の思惑は何か，社会がどのような方向に向かっているか，その真実を究明し，独走する権力構図を監視する役割に尽力した多喜二はその後，『蟹工船』という名作を生み出すこととなった。しかし，皮肉にも『蟹工船』を発表した1929年に多喜二は，長年務めていた北海道拓殖銀行小樽支店を依願退職させられ，職を失うことになる。退職の真実は最近になって明らかになった。2005年に旧拓殖銀行の残務処理中に出てきた内部資料の複写が市立小樽文学館に寄贈した当時の資料には「左傾思想を抱き『蟹工船』『一九二八年三月一五日』『不在地主』等の文芸書刊行書中当行名明示等言語道断の所為ありしによる」[20]ことが「行員の賞罰に関する書類」に記されており，1929年11月16日の発令になっている[21]。

こういった状況は1925年に公布された治安維持法の影響によって，次第に思想弾圧の荒波に強い抵抗の背景となってくるのである。不条理を目の当たりにする多喜二の労働・社会運動への意識も次第に鼓舞され，第１回普通選挙を取り巻く警察の拷問事件を内容にした小説『1928年３月15日』など，官憲の横暴さと労働者の不当な扱い，社会的差別の実態を告発する作品を書き続け，さらには1931年に共産党入党を通して思想活動に傾倒するようになる。国際的に展開される反戦運動にも支持を表明し，上海反戦会議の支持運動をも強く支えていた多喜二だ[22]が，日本軍国主義が展開する戦争に反対を表明し，労働者の苦しみを訴える創作活動を続け，地下活動も行っていたため，北海道拓殖銀行の解職３年後の1933年２月20日，東京の築地署に逮捕され，拷問の末に虐殺された[23]。

文筆活動によって貧窮に苦しむ労働者の生活向上と社会的地位，社会の改善を訴えてきた多喜二の不幸な死について，魯迅やクラルテの活動にも加わったロマン・ロランなど世界の良識ある文学者らによる抗議と哀悼の意が寄せられた。また，生前には意を共にした金斗鎔と同じ事務室で交流を交わし[24]，金龍済と親交を結んで[25]，国境を越えた日韓交流を行っていただけに，死後，彼らの多喜二追悼も忘れることはできない[26]。

しかし，日本の戦争立国への野望はやがて国家総動員・総力戦・一億玉砕へと敗北への道を走り，多喜二の作品は日本の敗戦まで禁書として表に出ることはなかった。だが，1974年に小林多喜二の映画が上映され，2001年の９・11テロ以後に強まる戦争やテロへの動きによる厭世的な社会雰囲気の中で，多喜二の生誕100周年，没後70周年を記念し，2003年には各地で多喜二の死を哀悼し，彼が唱えた人間的生活保持と平和社会への希求に対する再評価が高まった。2005年には「時代を撃て　多喜二」の映画が出来上がり，労働者と資産家の実態と雇用体制の現状を告発し続けた多喜二の社会意識と作家精神は歴史の時代逆行を懸念する‘クラルテ’として再び照らされた。そして，2008年には経済不況もあって，多喜二の『蟹工船』を描いた漫画は広く読まれ，2009年には再び映画として全国上映に到った。

（左より筆者の机周辺にある多喜二関連書籍の一部と，多喜二発行の『クラルテ』と小牧近江訳のバルビュス『クラルテ』）

その背景には多喜二の同時代認識，換言すると，現在の急変する資本主義社会に肉薄する同質感に繋がる諸要因，即ち，労働を支える諸制度の崩壊と新しい形の搾取が起こり始め，使い捨て雇用形態による人間的価値の低下を認識した人々と，多喜二の資本主義への視線が合致したことがあったと指摘することができよう[27]。

なお，多喜二が残した作品については文学的側面から実に様々な意見や評価があるものの，総じて述べれば，文芸評論家の三浦光則が明言するように，「多喜二の小説を見ると，いずれも明確な主題と方法意識をもって書かれていることがわかる。たとえば『一九二八年三月一五日』や『蟹工船』を書き終えた多喜二が，蔵原惟人に宛てた書簡をみても，そのことはわかる。ここにも多喜二の理論家としての片鱗をみてとることができる」[28]のであり，作家同盟の書記長の立場もあったが，多喜二の時代認識への危惧と社会的使命を実践的に行動しようとした一途な信念に徹したことが時代を経ても生き続けている理由である。多喜二が残した『蟹工船』や『1928年３月15日』『不在地主』（共に1929年）『工場細胞』（1930年）『オルグ』『独房』『安子』（1931年）『地区の人々』（1933年）などのメッセージは我々が油断すると姿を現し，弱者を陥れやすくなる構図に警鐘を鳴らす時代の灯火として輝いていると評価しても過言ではなかろう。

３．鶴彬と槇村浩

欧米列強との競争，植民地獲得と資源確保と市場開拓を目論んだ大陸への侵略戦争，米騒動らの国内の諸問題から民心を逸らそうと企てられたシベリア出兵での惨敗，そして，満州事変，日中戦争[29]，太平洋戦争による未曾有の犠牲者，各地の米軍による空襲と広島・長崎原爆など，激化する軍国主義の戦争遂行に翻弄され，対内外的に莫大な加害と被害を経験し，敗戦に至るまでの近代日本社会で，反戦・平和・国際主義意識を持つ文学者がその思想を貫くことは並大抵のことではなかった。その中で文学者としての自覚と主体性を持ち，武力的弾圧に抵抗し，平和社会を希求した尹東柱や小林多喜二の精神について前述してきたが，戦時中の日本には弾圧の中でも反戦の意志を明確にし，非戦の立場から川柳を書き続けて29年の生涯を閉じた天才川柳作家の鶴彬（本名は喜多一二，1909～1938）や刑務所での拷問を煩って26才の生涯で世を去った神童の槇村浩（本名は吉田豊道，1912～1938）のような勇気ある人生がいたことも忘れてはならない。本稿では彼等の概括と紹介に留まっているが，我々の時代を支えてきた近代文学青年の抵抗の精神を再考する。なお，このテーマについて深く掘り下げることは次の課題にしておく。

１）鶴彬

鶴彬は1909年１月１日，石川県河北郡高松町に，竹細工職人の喜多松太郎とスズの次男として生まれた。翌年に叔父の喜多弁太郎の養子となり，1915年尋常小学校に入学し，1923年には高等小学校を卒業する。しかし，その間，９才の時に父が死に，母が再婚して兄弟姉妹６人は離別する冷酷な現実が体と心に刷り込まれ，過酷な生活体験はのちに川柳の表現に，生きた実感を見出すようになるのである[30]。1925年から川柳誌『影像』にデビューを契機に，多様な川柳誌に作品を寄せるようになる。1927年には井上剣花坊の家に寄ったり，初の川柳の評論「僕らはなにをなすべきや」を『川柳人』に発表するなど，社会意識に芽生え始める。

1930年１月に金沢第７連隊に入営するが，３月１日（旧陸軍記念日）連隊長の訓辞に疑問を抱いて質問した事件により重営倉に入れられ，1931年には金沢第７連隊に『無産青年』を勧めたりしたいわゆる「赤化」事件により軍法会議にかけられた結果，刑期１年８ヶ月の収監生活を余儀なくされる。1933年に４年間の在営を終えて除隊後，積極的に執筆活動を行う。彼は搾取され，苦しむ弱者を代弁するかのような社会問題意識を作品化して行った[31]。

半島（朝鮮）の生まれでつぶし値の生き埋（うめ）となる
母国掠（かす）め盗（と）った国の歴史を復習する声
行きどころのない冬を追っぱらわれる鮮人小屋の群れ（『火華』36年２月号）

しかし，時代はもはや日中全面戦争の時期，９月に応召入隊命令が出るが，10月頃，井上信子推薦で東京深川木材通信社に就職する。険しい時代とともに次第に反戦意識を高めていた鶴は既に思想犯とみなされ，1937

年12月３日に治安維持法違反の嫌疑で特高警察に検挙され，東京都中野区野方署に留置された。しかし，度重なる拷問や留置場での赤痢に煩い，1938年９月14日に29才で世を去った。その死後から40年になろうとする時，『鶴彬全集』が一叩人編で出されるが，編者は鶴彬への追究趣旨を次のように語っている。

「むろん彼鶴彬の人民への献身に終始した生涯への尊敬と追慕の念，彼の優れた筆の跡によるものはいうまでもないし（中略）鶴彬があたかも短い生涯を予測したかの如く，貧苦と闘い，新興川柳の仲間の裏切りや天皇制政府軍部の抑圧弾圧に抗して，全力を傾注した作品・評論を通して，世に訴え続けてきた人民の文芸のあり方，それを具現化する方法等，あまねく指摘されたほとんどが，彼の死後やがて四〇年になろうとする今日に至ってなお，現実のものになっていない事を物語るものではなかろうか。」[32]

つまり，鶴が悩み続け，訴え続けた当時の時代状況と40年後の状況がほとんど変わってないことに対する歯がゆさや，鶴の時代認識の再評価の側面から『鶴彬全集』が出されたことがわかる。それは本稿で紹介している他の文学青年らと通じ合うものであるが，彼等が懸念していた社会が今もなお改善されていないことを考えると，彼等が直視した時代への洞察力は極めて鋭かったと評価できよう。

鶴彬について文芸評論家の大崎哲人は，「想像力を働かせて戦争とは何かを，民衆の現実の生きた姿と息づかいから短い言葉で抉り取った。だからこそ，生きる希望をもち，永遠に平和を願う人々の口から口へとその川柳は時代を超えて伝播していく。」[33]のだと力説している。時代に翻弄され，恵まれない環境に苦しみ多き短命であったが，鶴彬への人々の想いは今なお衰えることはない。

なお，遺骨は岩手県盛岡市本町通２町目６～24の光照寺墓地に安置され，釈明證位の戒名で眠っている[34]。

２）槇村浩

幼い時から神童といわれた才能豊かな持ち主であった槇村浩の本名は吉田豊道である。豊道は1912年６月１日に現在の高知県高知市廿代町89番地で父の才松と母の丑恵の長男として生まれた。父は三重県津市出身で易学を業としたが，豊道が６才の1918年11月に胃癌で亡くなり，丑恵は高知市広岡町で生まれた才女であったと言われる[35]。

豊道は1920年に高知第６小学校に２年半を在学したが，優秀な成績であったため，1923年４月４日に土佐中学本科１年に編入学し，４年間在籍するが，1926年にチフスを患って休学後に海南中学に転入する。少数エリート育成の学校から神童とされてきた豊道だが，３年生になると，化学の時間さえも『共産党宣言』『資本論』などのマルクス思想論をむさぼるように読みこなすのである。こうした徹底的な姿勢がのちに，「侵略戦争の本質を正確にとらえているばかりでなく，イメージの鮮烈さ，格調の高さで評価される」[36]ことに繋がる秀作を突きつけることになるのである。

豊道は次第に戦時状況の険しさ故に強まる軍国少年育成に反発を覚え，学内で行われた軍事訓練や担当将校に対する強い抵抗として軍事教練筆記試験には白紙答案を提出した[37]。このような反抗的姿勢によって退学を余儀なくされるわけだが，彼を思ってくれた寺石正路先生の世話で豊道は海南中学から岡山市のリベラルな校風を持つ関西中学へ転校するのである。当時，そういった校風を背景に，社会意識の高い朝鮮人学生らも在籍していたため，のちに朝鮮の状況を詳細に描いた「間島パルチザンの歌」は，その学校での朝鮮人学生との深い交流から見出されたものではないかという推察も出ている[38]。だが，今になっては岡山関西中学での様子は知ることができない。

1931年に関西中学を卒業後に高知にもどった豊道は作家同盟高知支部を結成し，同年９月に勃発した満州事変の実態を喝破し，年末には高知座で「戦旗防衛講演会」を開く[39]。さらに，1932年に日本の中国や朝鮮に対する侵略戦争の実態に迫った「生ける銃架」[40]と「間島パルチザンの歌」（『プロレタリア文学』1932年４月号）を発表し，帝国主義侵略戦争の本質を吐露するとともに，プロレタリア作家・槇村浩としての旺盛な執筆活動を通して反戦・非暴力社会への意を明らかにした。以下は朝鮮の武装解放闘争を優れたイメージによる抒情的かつ繊細的人間性のタッチで描かい「間島パルチザンの歌」である。この詩を通して，槇村の詩才の優秀さを読み取ることができよう。

「間島パルチザンの歌」
「간도 빨치산의 노래」

思い出はおれを故郷へ運ぶ
추억은 나를 고향으로 데려가네

白頭の嶺を越え，落葉松（からまつ）の林を越え
백두산 꼭대기를 넘어 낙엽송의 숲을 지나

蘆（あし）の根の黒く凍る沼のかなた
갈대 뿌리 검게 얼어붙은 늪의 저 편

赫（あか）ちゃけた地肌に黝（くろ）ずんだ小屋（こや）の続くところ
불그스럼한 갈색 터에 거무스럼한 오두막집이 이어지는 곳

高麗雉子（こうらいきじ）が谷に啼（な）く咸鏡（かんきょう）の村よ
고려 까치가 계곡에 울어대는 함경도의 마을이여

雪溶けの小径を踏んで
눈 녹은 작은 길을 밟고

チゲを負い，枯葉を集めに
지게를 지고 낙엽을 줏으러

姉と登った裏山の楢林よ
누이와 오르던 뒷 산의 숲이여

山番に追われて石ころ道を駆け下りるふたりの肩に
산지기에 쫓겨 자갈밭을 쫓겨 내려오던 둘의 어깨에

背負縄（しょいなわ）はいかにきびしく食い入ったか
지게의 어깨끝이 얼마나 힘들게 파고들었던가

ひびわれたふたりの足に
터갈라진 남매의 발에

吹く風はいかに血ごりを凍らせたか
부는 바람은 얼마나 피 응어리를 얼렸던가

（중략）
おお三月一日
오오…3 월 1 일

民衆の血潮が胸を搏（う）つおれたちのどのひとりが
민중의 피가 가슴을 치네 우리들의 누군가가

無限の憎悪を一瞬にたたきつけたおれたちのどのひとりが
무한의 증오를 한순간에 내리치네 우리들의 누군가가

一九一九年三月一日を忘れようぞ！
1919년 3 월 1 일을 잊을소냐 !

その日
그 날

「大韓独立万歳！」の声は全土をゆるがし
［대한 독립만세 ! ］소리가 전국을 뒤흔들고

踏（ふ）み躙（にじ）られた日章旗に代えて
짓밟힌 일장기 대신에

母国の旗は家々の戸ごとに翻（ひるがえ）った
모국의 깃발은 집집마다 펄럭이네

胸に迫る熱い涙をもっておれはその日を思い出す！
가슴에 밀려오는 뜨거운 눈물로 나는 그 날을 상기한다 !

反抗のどよめきは故郷の村にまで伝わり
반항의 함성은 고향 마을까지 전해지고

自由の歌は咸鏡（かんきょう）の峰々に谺（こだま）した
자유의 노래는 함경도 산골마다 메아리쳤지

おお，山から山，谷から谷に溢れ出た虐（しいた）げられたものらの無数の列よ！
오오...산에서 산으로, 계곡에서 계곡으로 넘쳐 흐르는 착취당한 자들의 무수한 행렬이여 !

先頭に旗をかざしてすすむ若者と
선두에 깃발 흔들며 앞으로 나아가는 젊은이와

胸一ぱい万歳をはるかの屋根に呼び交わす老人と
가슴 가득히 만세를 저멀리 지붕까지 외쳐대는 노인과

眼に涙を浮かべて古い民衆の謡（うた）をうたう女らと
눈에 눈물이 어린채 오랜 민중의 노래를 부르는 여인들과

草の根を噛（かじ）りながら，腹の底から嬉しさに歓呼の声を振りしぼる少年たち！
풀뿌리 씹으며 가슴 속 깊은곳에서 기쁨으로 환호의 소리를 쥐어짜는 소년들 !

赫土（あかつち）の崩れる峠の上で
적토가 무너지는 산마루 위에서

声を涸らして父母と姉弟が叫びながら，こみ上げてくる熱いものに我知らず流した涙を

쉰 목소리로 부모 형제 외치며 치밀어 오르는 뜨거운 것에 나도 모르게 흐르는 눈물을

おれは決して忘れない！
나는 결코 잊지않으리！（李修京訳，詩の後部分は省略）[41]

槇村の作品について高い評価と自らの深い想いを寄せたのが，2009年２月13日に行われた尹東柱追悼前夜祭で開催の言葉を述べた東京学芸大学の鷲山恭彦学長である。氏は尹東柱を再考する意味を述べるとともに，「（槇村浩は）1912年に生まれていますから，尹東柱より５歳年長で，1938年，26歳でなくなりました。２人は，同時代を生きました。時代の矛盾を一身に背負い，それを打破する道を，それぞれに模索し，詩に歌いました。槇村浩の場合は，尹東柱より戦闘的でした。反戦活動をすると共に韓国朝鮮の人民と日本の人民との力強い連帯を呼びかけました。『生ける銃架』は，人の形を失い機能と化した兵士への呼びかけで，日本の満州駐屯兵士にささげられ，『間島パルチザンの歌』は，韓国朝鮮の人々の反帝闘争を深い思いを込めて描いたものでした。奇しくも尹東柱はこの間島に生まれています。」[42]と，時代の不条理にもがいた当時の若き青年らの苦悩と詩才に触れている。

しかし，当時この詩が発表された時，時代は狂うばかりであり，槇村は治安維持法違反の罪名で1932年４月に高岡署に連行され，激しい拷問などを受けるようになった。虐げられつつも転向に屈しない強靭な精神力を貫いた槇村は，1935年に満身創痍の身で高知刑務所から出獄し，新たな雑誌発行の準備をするなど，作品発表のために努力を続けた。だが，1932年５月には既に政党内閣終焉後の斎藤実による「挙国一致」内閣の時代であり[43]，大陸との戦争の暗雲に駆られていたため，言論は弾圧され，自由な表現はできなくなっていた。そして，いわゆる人民戦線事件によって再度検挙されるようになる。

ちなみに，1932年は満州侵略開始の翌年で，準戦時経済体制への移行とファシズムへの進行は階級的・社会的矛盾をより拡大させ，左翼思想活動家たちは日本共産党の全国代表者会議直前に約1500人が検挙され，思想弾圧の激化とともに戦争一辺倒への道を歩むのである[44]。

槇村浩はこの時，既に刑務所での拷問などから病気を患っていたが，翌年１月に重病とされ，土佐脳病院に運ばれたが，翌年の1938年９月３日，26才の若さで帰らぬ人となった。その愚直な態度や揺れない姿勢を通してまっすぐ表現する槇村に対して，もはや暴力的対応しか残ってなかった当局の追い込まれた状況を容易に伺える。

ある意味で，彼らの合理的な論理に対応できることは難しく，理不尽かつ武力的に社会を動かそうとした権力側は人々の良心的行動に対して国家暴力という敗北的行為しか残ってなかったかも知れない。襲いかかる脅威と抑圧に屈しない彼らの姿勢を死へ追い込む事で，官憲側の焦りや論理に欠けた非人道的行為が露呈されたのは言うまでもない。

おわりに

以上，本稿では東アジアという屋根の中で苦しみ，武力によって20代で虐殺された４人の文学者を掻い摘んで述べてみた。

彼らは軍国主義に翻弄される社会情勢に対して，文学を手段として非暴力・基本的人間生活の確保を訴え，帝国主義の本質の矛盾を指摘し，平和な日常生活を享有することに尽力した若者であった。しかし，彼らの無垢な心は権力によってねじ曲げられ，虐殺・獄死という結果となった。戦争遂行や思想統制が蔓延した時代の過ちを指摘し，平和な生活を追求した文学者に対する権力側の暴力的答えであった。死人には口はないという。しかし，彼らの真実を追究し，武力的強圧に抗う精神は時代や民族を越えた人類普遍の力となり，時代が不幸な歴史に向かおうとする際，暗闇を灯す‘光’となってくれる。それこそ，国境を越えた「文学」の偉大な力であり，時代を描き続けた作家精神の表れだと言えよう。その力は，未来を紡ぐ我々に強いメッセージとなって，反戦・非暴力への道標として蘇るのであり，本稿で紹介した４人に対する昨今の社会的動きからもそれを立証するに足りる。

東京学芸大学の鷲山恭彦学長は，「現在，依然として悪い政治があり，差別があり，搾取があり，戦争への

胎動があります。しかし時代は大きく進みました。かつて尹東柱や槇村浩が思い描いた連帯と共同と共生の夢は，今や多くの人々の中に根つき，力強く育ちつつあります。現代の言葉で言いますと‘国境を越えた市民の連帯’です。そして‘人権・平和・福祉・環境’といった共通の価値を，更に内実を豊かに創造していこうという動きが諸処に起こっています。こうした時代のうねりの中で今日は，改めて尹東柱の生涯と文学的業績を追尋し，共有しあう日です。留学の学びの夢を奪われ，志半ばで倒れた尹東柱を追悼し，その思いを共有すると共に，やはり同じ時代，抑圧と矛盾の中で闘った，槇村浩のような，心ある日本人もいたことを思い起こしていただきたいと思います。」[45]と述べながら，健全な地球社会を維持するために国境を越えた積極的な市民連帯への必要性を説いている。

本稿で取り上げた尹東柱，小林多喜二，鶴彬，槇村浩の４人の文学青年は文学を武器として社会の不条理を悟らせ，平和を希求した精神であり，最後に引用した鷲山恭彦論の根底に流れる非暴力精神とも脈を同じくする「人類普遍の共有すべき財産としての昇華」にその意識を共感するものだといえる。

彼等が残した平和精神を受け継いで実践することに，21世紀の良心的市民のあり方があるのではなかろうか。閉塞さが増す現代社会の矛盾の中で，我々はヒューマニズムに徹した彼等の行動する精神こそ未来社会を生きる術だという共通認識を鼓舞する必要がある。日韓はもちろん，東アジア地域の民衆，世界各地の文化的相違点を認め合い，緑豊かな地球環境をともに保全し，差別や暴力のない絶対平和精神を貫く市民層が作られる時，彼等の死を以て守ろうとした人類社会の具現が可能になるだろう。そして，不幸な歴史の繰り返しを学習した人類の叡智が集まる時，明日の不幸も防止できる術が生まれるのであり，歴史が生かされることになるだろう。その意味で，社会の指南としての文学の存在はもちろん，彼等の身を以て残した時代精神は今後も国境を越えて人類の平和構築に貢献する融和力になってくれると考える。

（写真；左は09年２月13日の東京学芸大学での尹東柱追悼前夜祭記念撮影，右は2008年９月15日にイギリスのOxford 大学で行われた小林多喜二国際シンポの様子）

＊なお，本稿は，2009年12月に発行された韓国の学術雑誌『アジア文化研究』第17集に「軍国主義の武力行為に抵抗した文学青年考察」として投稿したのを翻訳・修正し，整理したものである。

注

１）最近は1945年２月16日に福岡刑務所で生体実験によって獄死したことが有力な説となっている。05年５月12日，日本語版デジタル『朝鮮日報』参照。

http : //japanese.chosun.com/site/data/html_dir/2000/05/12/20000512000006.html

2009年８月15日，韓国 SBS―TV で放送された特集「그것이 알고싶다-윤동주, 그 죽음의 미스터리」（それが知りたい－尹東柱，その死のミステリ）でも，人体実験に関するアメリカ政府の新たな資料をもとに追及された。

２）宋夢奎は1917年９月28日，満州国間島省延吉県新村明東屯の教師出身の家で生れる。尹東柱の父親である永錫が宋夢奎の母・信永の兄。恩眞中学校及び国民高等学校卒業後，在京城府私立延禧専門学校文科を卒業。WWⅡ中の1942年に京都帝国大学文学部史学選科生となる。内務省警保局『特高月報』1943年12月分「在留朝鮮人運動の状況　在京都朝鮮人学生民族主義グループ事件策動概要」114頁。朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成　第五巻』1976年，三一書房，290頁参照。

3）宋友恵『空と風と星の詩人　尹東柱評伝』愛沢革訳，藤原書店，2009年，225～230頁参照。

4）鄭芝溶は1902年に忠北沃川で生まれ，1923年に同志社大学英文学科に入学し，６年間の日本留学時代に「郷愁」や「鴨川」など，1930年代を代表する現代モダニズム詩人となった。『京卿新聞』の主幹や梨花女子大学の教授，ソウル大学の講師などを務めたが，韓国戦争の際に拘禁され，北朝鮮の移送された後，行方不明となった。詩才も高く，韓国では国民詩人と言われ，地元では今なお彼を称える行事が毎年開催されている。

5）宋友恵，前掲『空と風と星の詩人　尹東柱評伝』194～197頁参照。尹東柱の遺品の中には『鄭芝溶詩集』が残されてあった。

6）李修京「京都で学んだ植民地朝鮮の詩人・鄭芝溶の「鴨川」朗読・インタビュー」（読売テレビ「京の音」，1999年３月20日 AM11時25分より。

7）内務省警保局『特高月報』1943年12月分「在留朝鮮人運動の状況　在京都朝鮮人学生民族主義グループ事件策動概要」116頁。上掲，朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成　第五巻』292頁参照。

8）尹は服役中の1945年２月16日（金）の午前３時36分に悲鳴を出して絶命したとされるが，病名は脳溢血で，九州帝大の医学部の生体実験の疑惑が残っている。なお，この時代にはアメリカ軍人の生態実験もあったことが当時，それを見ていた医者らによって証言されている。

9）この「ハヌル」については，敬虔なクリスチャンであった尹東柱が仰いだのは神様の存在を意味する天だけだと解釈する傾向であるが，儒教社会でもっとも崇拝されていた「空」に対する絶対的認識だとする解釈も可能である。

10）2005年９月，筆者の勤務校である東京学芸大学と延世大学大学院の姉妹提携大学締結のために鷲山恭彦学長と筆者が訪ねた際，延世大学大学院長らが案内して下さった。その縁もあって，2009年２月13日に本学で鷲山学長の祝辞を受けて尹東柱追悼前夜祭を行った。

11）『連合ニュース』2009年７月11日付。
http : //media.daum.net/society/others/view.html?cateid=1067&newsid=20090711151110036&p=yonhap

12）http : //www.sctoday.co.kr/news/articleView.html?idxno=1676

13）http : //www.yonhapnews.co.kr/bulletin/2009/07/02/0200000000AKR20090702000300101.HTML?did=1179m
『Asia Today』2009年７月３日。http : //www.asiatoday.co.kr/news/view.asp?seq=263545

14）李修京「短い生涯　近代史と重ね」『北海道新聞』2009年４月12日，15面。

15）『韓国日報』2009年８月４日。http : //dc.koreatimes.com/article/539854

16）筆者は近代戦からは国家間の戦争が巨大な挙国ビジネスになっていることに注目し，戦争経済としてその構造を喝破し，指摘してきた。一例として，李修京『帝国の狭間に生きた日韓文学者』緑陰書房，2005年など。

17）アンリ・バルビュス『クラルテ（Clarté）』小牧近江訳，ダヴィッド社，1952年，258～261頁参照。

18）詳細は李修京の『韓国の近代知識人と国際平和運動』（明石書店，2003年）と『帝国の狭間の日韓文学者』（緑陰書房，2005）などで確認できる。なお，韓国では金基鎭らに影響を与え，大衆文芸論や KAPF 結成に影響を及ぼした。

19）参加同人には小樽庁商同期の片岡亮一，斉藤次郎，蒔田栄一（東京外語学校出身），新宮正辰（十二銀行小樽支店勤務），戸塚新太郎（小樽中出身），宇野長作（庁商同期），島田正策（庁商１年先輩）らであり，「はじめは勢い込んで，大正十三年に一，二，三輯を出したが，第四輯は大正一四年，第五輯は大正一五年と，遂に力尽きて終刊とせざるを得ない結果となった。」島田正策「『クラルテ』の思い出」『本郷だより』第18号，不二出版，1990年７月，３頁。

20）『朝日新聞』2005年10月30日付インターネット新聞参照。
http : //www.asahi.com/culture/entertainment/news/TKY200510290255.html

21）同上。因みに，当時の多喜二の退職金は「1124円14銭なるも半額の560円給与」になっており，不当な解雇であることが明らかになった。

22）塩田庄兵衛・橋本進編『反戦平和に生きた人々』草の根出版会，1999年，80～83頁参照。

23）多喜二と同年の1903年に北海道の新十津川村出身で，のちの東大新人会にも名を連ねた西田信春も絶対反戦・平和主義を貫きつつ，『無産者新聞』の編集に関わるほか，多喜二よりも４年前の1927年に共産党に入党する。しかし，1933年２月11日に九州地方の共産党大検挙（検挙者508人）の荒波に飲まれ，福岡署で30才の若さで虐殺された。
http : //www.jcp.or.jp/akahata/aik4/2005-02-10/ftpfaq12_01.html

24）YI Sookyung, Kim Dooyong and Kobayashi Takiji, *Report of 2008 Kobayashi Takiji Memorial Symposium at Oxford*, 2009, p.196.

25）金龍済「小林多喜二横顔記」『朝鮮文学』1937年３巻４～５号，５月号，128～132頁参照。なお，この資料は早稲田大

学名誉教授で尹東柱の墓を発見した大村益夫教授からご教示を頂いた。謝意を記しておく。

26）筆者が2008年に Oxford 大学で発表した次の論文に詳述されている。李修京「*Kim Dooyong & Takiji*」『多喜二の視点から見た　身体　地域　教育』　国立大学法人小樽商科大学出版会，紀伊国屋書店発売，2009年２月，187～200頁。（YI Sookyung, Kim Dooyong and Kobayashi Takiji, *Report of 2008 Kobayashi Takiji Memorial Symposium at Oxford*, 2009, pp.187～200.）

27）井竿富雄・李修京「小林多喜二の時代認識と同時代のプロレタリア作家についての考察」『東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅰ』第60集，2009年１月，233頁参照。なお，本稿には井竿富雄によって多喜二の作品の概括が詳細に紹介されてある。

28）三浦光則『小林多喜二と宮本百合子』光陽出版社，2009年，86頁。

29）2005年11月12日と14日，筆者は二度にわたって北京郊外の盧溝橋を訪ねる機会を得たがその際，1937年７月７日のあの激戦を物語る銃弾などの痕跡を城壁から確認することができた。なお，05年に風化する戦争の実態と記憶を残す作業の一環として盧溝橋に抗日戦争記念館が建てられていた。

30）大崎哲人「プロレタリア文学と時代　恐慌下，希望を見出した人びと」『週刊新社会』第646号，2009年８月18日号，８面参照。

31）一叩人編『鶴彬全集』たいまつ社，1977年，454～459頁参照。

32）前掲『鶴彬全集』462頁。

33）大崎哲人「プロレタリア文学と時代　恐慌下，希望を見出した人びと」『週刊新社会』第647号，2009年８月25日号，８面。

34）前掲一叩人編『鶴彬全集』454～459頁参照。

35）宮崎清『詩人の抵抗と青春』新日本出版社，1979年，７頁参照。

36）宮崎清『詩人の抵抗と青春』新日本出版社，1979年，24頁。これは槇村が満州事変の本質を暴いた「生ける銃架」の詩を宮崎が評価した言葉であるが，槇村作品全体を見てもこれらの評価ができるほど，彼の作品には極めて事実的かつ鮮烈さが印象的だといえる。

37）当時の同級の富永三雄の証言による。同上，15～18頁参照。

38）宮崎清『詩人の抵抗と青春』新日本出版社，1979年，18～19頁参照

39）同上，23～30頁参照。

40）1931年10月24日作だが，1932年２月の『大衆の友』で「満州駐屯軍兵卒に」と副題をつけて発表される。塩田庄兵衛・橋本進編『反戦平和に生きた人々』草の根出版会，1999年，74～76頁参照。

41）『間島パルチザンの歌』槇村浩詩集，新日本出版社，1964年。

42）鷲山恭彦「尹東柱，再び学び舎へ－尹東柱と槇村浩と大原富枝と－」2009年２月13日，尹東柱追悼前夜祭の開催挨拶より。

43）宮田節子解説・監修「未公開資料」　朝鮮総督府関係者録音記録（１）」東洋文化研究第２号抜刷，2000年３月，38頁参照。

44）朴慶植『８・15解放前在日朝鮮人運動史』三一書房，1979年，250頁参照。

45）鷲山恭彦「尹東柱，再び学び舎へ－尹東柱と槇村浩と大原富枝と－」2009年２月13日，尹東柱追悼前夜祭の開催挨拶より。

46）http：//issue.media.daum.net/editorial/0808_abroad/view.html?issueid=3488&newsid=20090415212007435&fid=20090429215809449&lid=20090408201629317

47）同書の書評は，李修京「短い生涯　近代史と重ね」『北海道新聞』2009年４月12日（日曜版）。

参考文献・資料

尹東柱『空と風と星と詩』，正音社，1948年。

小林多喜二編『クラルテ』第１～第５輯復刻版，不二出版，1990年。

塩田庄兵衛・橋本進編『反戦平和に生きた人々』草の根出版会，1999年。

島田正策「『クラルテ』の思い出」『本郷だより』第18号，1990年７月。

宋友恵『空と風と星の詩人　尹東柱評伝』愛沢革訳，藤原書店，2009年。

Henri Barbusse『クラルテ（Clarté）』小牧近江訳，ダヴィッド社，1952年。

YI Sookyung, *Kim Dooyong and Kobayashi Takiji*, Report of 2008 Kobayashi Takiji Memorial Symposium at Oxford, 2009.

内務省警保局『特高月報』1943年12月分「在留朝鮮人運動の状況　在京都朝鮮人学生民族主義グループ事件策動概要」。

朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成　第五巻』三一書房，1976年。

朴慶植『８・15解放前在日朝鮮人運動史』三一書房，1979年。

金龍済「小林多喜二横顔記」『朝鮮文学』1937年３巻４～５号，５月号。

李修京他共著『いま中国によみがえる小林多喜二の文学』東銀座出版社，2006年。

李修京『帝国の峡間に生きた日韓文学者』緑陰書房，2005。

李修京「文化交流と平和社会の創造」日本平和学会編『平和研究29』早稲田大学出版，2004。

李修京「近現代の韓日市民連帯と平和運動考察」関東大震災80周年記念行事実行委員会編『世界史としての関東大地震』日本経済評論社，2004。

李修京「Kim Dooyong & Takiji」『多喜二の視点から見た　身体　地域　教育』　国立大学法人小樽商科大学出版会，紀伊国屋書店発売，2009年２月。

李修京「短い生涯　近代史と重ね」『北海道新聞』2009年４月12日，15面。

井竿富雄・李修京「小林多喜二の時代認識と同時代のプロレタリア作家についての考察」『東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅰ』第60集，2009年１月。

三浦光則『小林多喜二と宮本百合子』光陽出版社，2009年。

宮田節子解説・監修「未公開資料」　朝鮮総督府関係者録音記録（１）」東洋文化研究第２号抜刷，2000年３月。

宮崎清『詩人の抵抗と青春』新日本出版社，1979年。

一叩人編『鶴彬全集』たいまつ社，1977年。

布野栄一『小林多喜二の人と文学』翰林書房，2002年。

鷲山恭彦「尹東柱，再び学び舎へ－尹東柱と槇村浩と大原富枝と－」2009年２月13日，尹東柱追悼前夜祭の開催挨拶より。

「ザ・コラム」『朝日新聞』2009年６月18日，朝刊15頁。

大崎哲人「プロレタリア文学と時代　恐慌下，希望を見出した人びと」『週刊新社会』第646号，2009年８月18日号。

大崎哲人「プロレタリア文学と時代　恐慌下，希望を見出した人びと」『週刊新社会』第647号，2009年８月25日号。

韓国 SBS―TV 特集放送「그것이 알고싶다-윤동주, 그 죽음의 미스터리」（それが知りたい－尹東柱，その死のミステリ）2009年８月15日。

日本語版デジタル『朝鮮日報』，2005年５月12日。

http : //japanese.chosun.com/site/data/html_dir/2000/05/12/20000512000006.html

http : //www.jcp.or.jp/akahata/aik4/2005-02-10/ftpfaq12_01.html（日本赤旗 HP）

「連合ニュース」2009年７月11日付。

http : //media.daum.net/society/others/view.html?cateid=1067&newsid=20090711151110036&p=yonhap

http : //www.sctoday.co.kr/news/articleView.html?idxno=1676

http : //www.yonhapnews.co.kr/bulletin/2009/07/02/0200000000AKR20090702000300101.HTML?did=1179m

『Asia Today』2009年７月３日。http : //www.asiatoday.co.kr/news/view.asp?seq=263545

A Study of Young Literati in the Resistance against Militarism and the Struggle for Peace in Japan : Mainly YOON Dongjoo, KOBAYASHI Takiji, TSURU Akira, and MAKIMURA Ko

Sookyung YI*

Department of Asian Language and Asian Cultures

Abstract

This article is a study of YOON Dongjoo, KOBAYASHI Takiji, TSURU Akira, and MAKIMURA Ko, the young literati killed in their twenties for resisting Japanese oppression militarism.

It reconfirms their aspiration for a more humane and just society and reflects on the message their lives offers to subsequent generation.

Key words : Death in there's twenties, Young literati against oppression,
Nonviolence (Ahimsa), The Power of Literature

* Tokyo Gakugei University, Humanities and Social Sciences

평화를 희망하며 무력에 저항한 문학청년들 고찰

; 윤동주, 고바야시 다키지, 츠루 아키라, 마키무라 코를 중심으로

이 수 경*

아시아 언어・문화 연구 분야

요 지

이 논문은 일본의 군국주의 폭압에 저항하다 20대에 살해당한 청년 문학가들 속에서 윤 동주, 고바야시 다키지, 츠루 아키라, 마키무라 코를 중심으로 고찰한다, 그리고 그들이 추구하려고 했던 가장 인간적인 평화사회에의 갈망의 내용을 재인식 하고 , 지금 현재도 높은 평가를 받는 그들의 시대인식과 미래에 강한 메시지가 된 그들의 삶에 대해서 생각해 본다.

키 워드 : 20대의 죽음, 저항 문학가, 비폭력, 문학의 힘

* 도쿄가쿠게이 대학교 인문사회과학계 소속